

万葉持統歌（一・二八）の主題

——惜春の抒情について——

松 本 尚 美

はじめに

持統歌「春過ぎて……」は万葉集では、

春過ぎて夏来たるらし白妙の衣干したり天の香具山

（一・二八）

とある。

百人一首でも著名なこの歌の研究史を見ると、春を経て迎えた夏を讃美する歌として捉えられている。単に夏の訪れを喜ぶ歌であれば、ホトトギスや卯の花などに代表される夏の景物が詠まれるはずであるが、この歌はそれらの伝統にあてはまらないものである。本研究では、この歌の本質が夏の到来を喜び歌う、ということに対する疑問の提示と、新しい惜春の抒情の理解を開陳したい。

万葉集を始め八代集の本文の引用は『新日本古典文学大系』によった。

一、万葉集と百人一首

二八番歌の先行研究を見てゆくと、大きく分けて三つの問題点を指摘できる。

①訓法

②四季観の発達

③白妙の衣の解釈

まず、訓法について研究史を考えてみる。二八番「春過ぎて」歌は、原文の第二句・第四句に、古来様々な訓がなされてきた。現在の訓に至るまでの歴史を、西郷信綱氏は次のようにまとめている。^①

この歌の原文「春過而 夏来良之 白妙能 衣乾有

天之香具山」が現在のような訓法に定まったのには歴史がある。第二句の夏来良之はナツキニケラシ(旧訓)、ナツゾキヌラシ(元暦校本・類聚古集)等であったのを契沖が代匠記(精)でナツキタルラシではなからうかとい出し、次いで春満(僻案抄)が断定して以来、訓法が定まった。第四句の衣乾有もコロモサラセリ(旧訓)、コロモホシタリ(古葉略類聚抄)、コロモホシタル(神田本)、コロモホステフ(細井本)と区々であったのを、宣長が「コロモホシタリ」とよむべしとして以来、定まったらしい。

ナツキニケラシと読むためには、「来計良之」と、「計」を加えねばならず、また、ナツゾキヌラシと読むには、「夏曾来良之」と、助辞の「曾」を加える必要がある。山田孝雄氏は、「芳流波吉多禮登(ハルハキタレド)」(十七・三九〇一)などの例を挙げて、キタルという動詞の存在から、「夏来良之」はナツキタルラシと読むのが正当としている。山田氏はさらに、第四句の「乾」は、「サラス」とよむいわれは無く、『字鏡』には「ホス」の訓があると述べ、ホシタリとよむ説をとっている。

「ナツキニケラシ」「コロモホステフ」の訓は、誤りとい

うものではなく、澤瀉久孝氏は、「来るらし」といふやうな言葉が王朝以後の人には考へられず」、キヌラシ、キニケラシと読んだとし、「完了の助動詞が加へられて調子はやはりかく、なだらかになつて、俊成や定家の認める歌詞になつてゐる」と述べている。^③

『万葉集全注釈』『万葉集全注』などの注釈書は、全て「ナツキタルラシ」「コロモホシタリ」という訓で、現在はこれで定説となつており問題とされていない。次に、四季観について考える。土屋文明氏、武田祐吉氏は、二八番歌の季節感について、次のようにまとめている。^④

古人の季節感は、實生活から来てゐるので、春秋を喜び夏冬を忌むのは、夏冬の季節が、古人の生活に取つて圧迫的であつたからである。春秋が来ると、古人は蟄伏から開放せらる喜びを感じるのである。そこで春秋の来たことを歌ふ歌は多く、夏冬の来たことを歌にすることは少かつた。しかるにこゝに生活が向上して、夏冬に対しても、これを客観視するだけの余裕が生じて来て、このやうな作品を生ずるのである。この歌では夏の来たことを、決して嫌つて居られない。むしろその清爽を喜んで居られる。其処に高雅な氣品が生じ

てゐるのである。

このように、季節を実生活に基づいて捉える考えとは逆に、新井栄蔵氏は、古代中国にみられる天帝自ら季節を定めるといふ「四時観」が、季節観に影響を与えたと考えている。⁽⁵⁾

伊藤博氏は、日本人の四季感と暦法の影響を次のように述べる。⁽⁶⁾

日本人の季節観は、古来、自然の運行、物色の推移にすなおに應じて認識されるのを特色とする。季節感⁽⁷⁾は、人間を主体にしてあるのではなく、自然を中心にして存在した。(略)

それに対し、月の運行を基準に、一―三月を春、四―六月を夏、七―九月を秋、十―十二月を冬というように定めることになったのは、中国の暦法の影響による。中国では天の子である天子が天然の運行を人為によつて秩序立てた。(略)この中国的暦法による四季の観念を日本人が知り取つていく過程は修史事業と密着している。(略)中国暦法の影響による日本の四季感⁽⁸⁾は、欽明朝以来次第に発展し、天武―持統朝のころに確立し

たと見てよい。

以上のように、春夏秋冬を、実生活の感覚ではなく月によつて分けたことによつて、四季感が誕生したとされている。伊藤氏は二八番歌にも暦法の影響をみており、さらに「ヤマトにそして日本に夏が訪れ来つた歓喜を、すこやかに宣言した歌である」と解釈している。暦法の影響について直接は触れていないが、土田文明氏、武田祐吉氏は「この歌では夏の来たことを、決して嫌つて居られない。むしろその清爽を喜んで居られる。其処に高雅な気品が生じてゐるのである」とし、窪田空穂氏も「この御製の季節は夏であつて、この當時としては特異なものである。加ふるに深い感激をもつて、夏を肯定してゐられる」と述べ、戸谷高明氏も「初夏の生活風景を季節の美としてうたつてゐるところに、この歌の新しさがある」として、夏の美意識の誕生を指摘している。⁽¹⁰⁾

また、二八番歌の主眼は夏の到来すなわち「季節の推移」にあるということが一般的な理解である。岩下武彦氏は先の四時観を踏まえて「季節の移り変わりを歌うことも中国文学の影響のもとに、天智朝以後可能となつたことが確かめられる」と述べている。⁽¹¹⁾

しかし、疑問となるのが、季節の移り変わり・夏の到来を喜ぶという美的価値観が、具体的にどのような中国文学作品の影響を受けているのかという点である。中国文学作品として『詩経』を、日本の漢詩集『懷風藻』を散見したが、どちらにも夏を美の主題として詠まれた作品は見られなかった。時代が下って白楽天（中唐）になると、『首夏』という題で、夏景色の美しさが称えられる作品が生まれているが、暦法が流入したばかりの時代にすぐに、夏の美意識が生まれたとは考えにくい。

次に「白妙の衣」について考える。前掲の研究者たちの説は、更衣の行事として白い衣が干されている実景ととらえている。白妙の衣の実態として、山田孝雄氏の「諸家、山のあたりの家に衣ほしかけたりといへり。掛け乾すと見る時は釋する外なかるべきが、この山に人の家ありきといふことも書に見えねば、今吾人が朝鮮にて野山の草の上に直ちに白布を布きて乾せるを見たる目にて考ふるに、これは實際にその山の草木の上に廣げ乾せるを見たまひしならむ」と白い布とする説、伊藤博氏の「聖なる天の香具山を齋き祭る人たちの齋衣¹³」とする説、人家の白衣とする説などが挙げられる。

西宮一民氏は、「大極殿跡から見れば見えなくても、天の

香具山のそばへ行けばいくらでも見える」として持統天皇の行幸の多さに着目し、「天の香具山に干した白衣を目撃されることはあり得たわけで、その強烈な印象に基づいて御製となつたと考へることは容易である¹⁴」と述べている。いずれの説も、「白妙の衣干したり」を実景としてとらえているのである。

一方、『百人一首』における持統御製歌の伝統的な解釈は、万葉集と異なっている。上條彰次氏は、『白妙の衣ほす』を比喩表現と解するのは旧注一般に見られる立場であり¹⁵と述べており、旧注一般の例を次のように挙げている。

春の間は霞ふかふかお、ひかくしてそれとも見えぬか
春過ぬれはかすみも立ちちらして夏の空に此山さた
くくと明白に見ゆるを白妙の衣ほすとはいふなり

（応永本百人一首抄）

春は霞にこもりてさたかにもみえさりつるか夏に成て
此山のはれやかに見ゆる白妙に見ゆるといふ也

（古典文庫『百人一首古注』）

旧注の解釈では、霞がかつて見えなかった山がはつきり
と見えるようになったことを指すが、歌詞に「霞」の語が

無いのに付け加えて訳すのは不自然であると後学によって否定され、現代の実景説がとられるようになった。

これに対し上條氏は、卯の花の「布・衣への見立ては、王朝期から中世へかけての普遍的な類型表現であつた」とし、次のような例を挙げ、「白妙の衣」卯の花」説をとつて¹⁶⁾いる。

ぬれ衣はすかとみればしろたへの卯花さけるあまの袖

かき (千五百番歌合・顕昭)

白妙のころもほすてふ夏のきて垣根もたわにさけるう

のはな (拾遺愚草・中)

さらに、上條氏は歌学雑書『桐葉集』の「四季装束色目」の項の「四月 しらかさね 更衣の事也 卯花の心歎面しろくうらおなじ」を挙げて、「卯花」は「更衣」に直結していると指摘して、「白妙の衣」卯の花」説を補強している。

これに対し、小林一彦氏は、「どうして「白妙の衣」で山の姿が明白に見えているという意味になるのか、換言すれば実際の風景は青々としているのなら、簡明直截にそう表現すればよいのに、なぜ「白妙の衣」などともって回った表現をしたのか。」と述べ、霞の衣説をはじめ定家の歌を例

証とする「卯の花」説を否定し、「白妙の衣」を実景としてとらえる解釈をしている。¹⁷⁾

万葉集における「白妙の衣」の解釈では、近年、実景説の他に見立て説もある。中西進氏は「話者としての持続」で、次の歌を例に見立て説を主張している。¹⁸⁾

筑波嶺に雪かも降らる否をかも愛しき児らが布乾さる
かも (十四・三三五一)

甲斐が嶺に白きは雪かやいなをさの甲斐の芸衣や晒す
手作りや晒す手作り (二三)

これらの歌は、雪が布に見立てられたもので、中西氏はさらに、「(山の白いものは何か)という問いの形式が、幾つかの歌なり伝承なりを貫いて存在するのである」として、二八番歌においても、この問答形式があてはまると考え、白妙の衣を雪に見立てたのではないかと述べている。

森斌氏は、「聖地で衣を乾すことがあるにせよ、藤原京から香具山が見えていることと、その山に衣が乾してある景を確認出来ることは同質ではない。即ち、人間の持つ視力では、衣を乾す山の景が認識できる程の距離にあつたと思えない」、「白い衣が夏の季節とは直接結びつかない」と

して、白妙の衣の実景説を否定している。

白妙の衣を「卯の花」とし、衣を干すことが前出の三三五一番歌に見られるように、「愛しき児」の行為としてとらえ、一首を次のように解釈している。¹⁹⁾

香具山には、初夏を飾る卯の花が咲いている。それを見た持統天皇は、春の桜が終わり、もう夏が訪れ来たことを知る。そして女性が愛しい人を思つて白い衣を乾している姿に見立てる。香具山では、春の桜衣が夏の卯の花に更衣しているではないか、と。

以上の先行研究から、二八番歌は「白妙の衣」について説が分かれ、実景説、見立て説があることが分かる。現代の主流としては実景説であるが、和歌全般を通してみると、恋や悲しみの涙で濡れたままの衣を乾かすひまもないという状態が評価されて詠まれており、衣を干した状態では、恋や悲しみが終わってしまうことになり歌として成立し得ない。二八番歌を恋歌と見ることはできないが、「衣ほしたり」は詠歌の対象とはなりにくく、実景としてとらえることは難しい。

二、「春過ぎて夏来たるらし」

「春過ぎて」とは春が終わつてという意味で、これと同じ表現は二八番のほかに四一八〇番にも見られる。

春過ぎて 夏来向かへば あしひきの 山呼びとよめ
さ夜中に 鳴くほととぎす… (十九・四一八〇)

四一八〇番は、題詞に「霍公鳥を感じる情に飽かずして懷を述べて作りし歌」とあり、霍公鳥を主題としている。そのため、この歌の背景となる季節は夏であり、「春過ぎて」は、霍公鳥の鳴く季節である「夏」という詞を導く働きをしている。作者の心はすでに夏に向かつており、「春」に対して特別な思いを込められているとは考えにくい。この他に類似表現として「春し過ぐれば」という句がある。

八つ峰には 霞たなびき 谷辺には 椿花咲く うら
悲し 春し過ぐれば ほととぎす いやしき鳴きぬ…

(十九・四一七七)

四一七七番の「春し過ぐれば」も、春が過ぎたのではと
とぎすが鳴く、という時間の流れを説明する働きを持つて
いる。しかし、前出の四一八〇番とは異なり、四一七七番
では春に対して「うら悲し」という価値付けがなされてお
り、春愁秋思の考え方に基づいて詠まれた歌といえる。こ
れと類似した内容の春の歌として、次の四二九〇番のよう
な歌が挙げられる。

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影にうぐひす鳴く
も
(十九・四二九〇)

春霞がたなびき、鶯のさえずりが聞こえるという春らし
い情景にありながら、「うら悲し」という感慨を持つており、
ここでも春愁の考え方がとられている。

しかし、春が愁わしい季節とばかり捉えられていたわけ
ではない。むしろ、次に挙げる表現などを用いて、春の到
来を喜ぶ歌が多く詠まれている。

春さらば逢はむと思ひし梅の花今日の遊びに相見つる
かも
(五・八三三)

春されば我家の里の川門には鮎子さ走る君待ちがてに

(五・八五九)
春なればうべも咲きたる梅の花君を思ふと夜寝も寝な
くに
(五・八三一)

うつせみは 恋を繁みと 春まけて 思ひ繁けは…

(十九・四一八五)

うちなびく春来たるらし山のもの遠き木末の咲き行く
見れば
(八・一四二二)

冬ごもり春さり来ればあしひきの山にも野にもうぐひ
す鳴くも
(十・一八二四)

年のはに春の来たらばかくしこそ梅をかざして楽しく
飲まめ
(五・八三三)

春のうちの楽しき終へは梅の花手折り招きつつ遊ぶに
あるべし
(十九・四一七四)

それぞれの歌数を挙げると、「春さらば」五首、「春され
ば」二十六首、「春なれば」一首、「春まけて」三首、「春
さり来れば」七首、「春来たるらし」三首、「春の来たらば」
二首、「春のうちの」一首を数えることができる。春の到
来を表す表現が豊富であるということは、春の季節に対し
て特別な感情を持っているということであり、そのように
考えると、「春過ぎて」という句には、梅の花が咲き、鶯が

鳴きはじめ、春の遊びが行われた春を惜しむ気持ちが進められているように思われる。

「夏来たるらし」に類似した表現は、四一八〇番「夏来向かへば」、一四八五番「夏まけて」が見られる。

夏まけて咲きたるはねずひさかたの雨うち降らばうつろひなむか
(八・一四八五)

一四八五番「夏まけて」は、「夏になつて」の意で、夏を待っていた主体は「はねず」の花となり、詠み手自身が積極的に夏を待っていたとは捉えにくい。

「夏」の語が単独で歌に詠まれることはほとんどなく、「夏草」十三首、「夏野」七首など、草や野を修飾する語として用いられている。

夏の野に繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものぞ
(八・一五〇〇)

人言は夏野の草の繁くとも妹と我とし携はり寝ば
(十・一九八三)

このころの 恋の繁けく 夏草の 刈り払へども 生ひしくごとし
(十・一九八四)

：夏草の 思ひ萎えて 偲ふらむ 妹が門見む なびけこの山
(二・一二二)

一五〇〇番は、夏の野が繁ってしまったて、姫百合が咲いたのに見えないという状態を、知ってもらえない恋の苦しさとをかけて詠み、一九八三番は、夏の野の繁る様と噂をたくさん立てられている状態とをかけて詠んでおり、いずれの歌も望ましくない状況を、夏の野の様子にたとえている。また、一九八四番は、夏草をいくら刈っても生えてくるように頻繁に恋をしてしまうことを詠み、一三一番は夏草が萎れるように気持ちが萎れるとして、わずらわしい心境や意気消沈した様子など、ここでも好ましくない状態を、夏草にたとえた歌となっている。このように、夏の野や草は、春の草木が繁った時のように評価されておらず、望ましくない状態の形容としてマイナスのイメージが持たれていると言える。

夏の特徴である暑さに関連する歌として、次の歌が挙げられる。

片岡のこの向かつ峰に稚蒨かば今年の夏の陰にならむか
(七・一〇九九)

六月の地さへ裂けて照る日にも我が袖乾めや君に逢はずして
(十・一九九五)

一〇九九番「今年の夏の 陰にならむか」では夏の日差しを避けて、木陰に涼を求める態度がみてとれ、一九九五番「地さへ裂けて 照る日にも」では、乾燥して地割れるほど強く日が照りつけることが詠まれており、夏の暑さが好ましくない状態であることが指摘できる。

野や草、日差しなどが、夏らしい状態にあると、それは喜ばしくなく避けたい状況にたとえられることが多い。そのように考えると、「夏来たるらし」という句を、単に夏が来たことを喜ぶ意としては捉えがたいように思われる。

三、「白妙の衣」と「香具山」

「白妙の」という句は、「袖」や「衣」の形容に用いられることが多い。「袖」にかかる歌は二十八首あり、「衣」にかかるものは二十六首が挙げられる。

白たへの 袖さしかへて なびき寝し わが黒髪のもま白髪に なりなむ極み…
(三・四八一)

我妹子に恋ひてすべなみ白たへの袖返ししは夢に見え

きや
(十一・二八一二)

妹が袖別れし日より白たへの衣片敷き恋ひつつぞ寝る

(十一・二六〇八)

夜も寝ず安くもあらず白たへの衣は脱かじ直に逢ふまで
(十二・二八四六)

四八一番は、妹と共寝したことを「白たへの 袖さしかへて」と詠みし、二八二番は、恋しい妹の夢を見るために白たへの袖を折り返して寝ることを詠んでいる。これらの「白たへの袖」は、男女の恋に係りつたもので、「袖」という詞が用いられるときは相聞の歌となる。

二六〇八番は、妹と袖を交わして共寝したことを恋しく思い出しながら、「白たへの 衣片敷き」と独り寝する様子を詠み、二八四六番は、妹に再会する日まで衣を着替えないと述べており、どちらも妹を恋しく思う気持ちだが、「白たへの衣」を用いて表されている。これらのことから、「白たへの」「袖」や「衣」は、恋を連想させる場合があると言える。

白妙の衣には、相聞以外の意味を持つ用例がある。

我が大君 皇子の御門を 神宮に 装ひまつりて 使

はしし 御門の人も 白たへの 麻衣着て…

(二・一九九)

玉梓の 道来る人の 泣く涙 こさめに降れば 白たへの 衣ひづちて…

(二・二三〇)

一九九番は、題詞に「高市皇子尊の城上の殯宮の時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌」とあり、二三〇番の題詞には「志貴親王の薨ぜし時に作る歌」とあることから、それぞれ高市皇子、志貴皇子の挽歌であることがわかる。ここでの「白たへ」の衣は死者を悼む葬送儀礼の礼服として表されている。

相聞、葬送儀礼の礼服以外の意味を持つ「白たへ衣」としては、次の例が挙げられる。

あらたまの 年経るまでに 白たへの 衣も干さず
朝夕に ありつる君は…

(三・四四三)

四四三番の「白たへの衣」は、題詞にある「撰津国の班田の史生丈部竜麻呂」が干すひまもないほど忙しく働いていた時に着ていた官吏の制服を指している。以上のことから、「白たへの衣」と詠まれた場合、相聞、葬送儀礼、官吏

の制服のいずれかを示すことになる。

しかし、二八番「白妙の 衣干したり」という句には、相聞や葬送儀礼、官吏の制服といった、一般的な「白たへ衣」の意味をあてはめにくく、二八番の「白妙の衣」が実景としては何を表しているのか判断するのは難しい。

次に、「衣」を干すという行為について考えてみる。

庭に立つ麻手刈り干し布さらす東女を忘れたまふな

(四・五二一)

五二一番は、題詞に「藤原宇合大夫、遷任して京に上る時に、常陸娘子の贈る歌」とあり、麻を干して布をさらす東女の自分を忘れないでくださいと詠みかけている。この歌からは、麻を刈るところから始める布作りが、恋人である女性の仕事であることが分かる。

相聞、葬送儀礼、官吏の制服といった衣の場合、「干す」という行為にはどのような意味を持つのか考えてみる。

照る月を闇に見なして泣く涙衣濡らしつ干す人なしに
ぬばたまの妹が干すべくあらなくに我が衣手を濡れて

(四・六九〇)

いかにせむ (十五・三七一二)

ただひとりして 白たへの 衣袖干さず 嘆きつつ…

(三・四六〇)

あらたまの 年経るまでに 白たへの 衣も干さず

朝夕に ありつる君は… (三・四四三)

六九〇番、三七一二番は、相聞の歌で、涙で衣が濡れているのに、干してくれる妹がいないうことを嘆いた歌である。妹の不在とその悲しみを強調するために、「干す人なしに」、「妹が干すべく あらなくに」と、衣を干せない状況を詠んでいるのである。

四六〇番は、題詞に「大伴坂上郎女、尼理願の死去を悲嘆しびて作る歌」とあり、ここでは涙がとめどなく流れて衣を乾かすこともできないほど嘆く様子が詠まれている。ここでも、死者を悼み悲しむ気持ち強い事を、衣を干さないことによって表現している。

四四三番は、官吏の仕事に昼夜を問わず忙しく働く様子を表すために、「白たへの 衣も干さず」と詠んでおり、ここでも衣を干さないことが、詠歌の対象となつてゐる。これらの事から考えると、二八番「白妙の 衣干したり」を実景の衣を干すという行為として考えると、衣を干さな

いことが主題となる歌の中にあつて特異な例であると言える。

万葉集に香具山を詠んだ歌は十三首あり、その内の六首は春の香具山を詠んだものである。

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち… (一・一二)

大和の 青香具山は 日の経の 大さ御門に 春山としみさび立てり… (二・五二)

天降りつく 天の香具山 霞立つ 春に至れば… (三・二五七)

何時の間も神さびけるか香具山の梓杉が末にこけ生すまでに (三・二五九)

天降りつく 神の香具山 うちなびく 春さり来れば… (三・二六〇)

ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも (十・一八二)

二番は、題詞に「天皇の、香具山に登りて国を望みたまひし時の御製の歌」とあり、春に行われる予祝儀礼の国見の折に詠んだ歌である。五二番は、青々とした香具山は春

山として茂り立っているという意で、香具山の春景色が詠まれている。二五七番は、春霞の立つた香具山を詠んでおり、ここでも春という季節と香具山とが結び付けられている。二六〇番は、題詞に「或る本の歌に云く」とあり、二五七番と類似した内容になっている。また、二五九番は、二五七番の反歌であることから、二五七番と同じく春の香具山を詠んだと言える。一八一二番は、霞たなびく香具山によつて立春を感じており、やはり香具山と春に深いつながりがあることが示されている。

国見の行事、草木の茂つて青々とした様、春霞のたなびく様子などの用例から、香具山は春の情景が詠まれることが多く、特に春を象徴する山として捉えられていることが分かる。

また、春の山を讃える用例として次の歌が挙げられる。

春山の咲きのををりに春菜摘む妹が白紐見らくし良しも
(八・一四二二)
朝日なす まぐはしも 夕日なす うらぐはしも 春
山の しなひ栄えて 秋山の 色なつかしき…

(十三・三三三三)

一四二一番は、春山に花が咲き乱れている様子と、妻の白紐を見るのは快いと述べている。春山の讃美と妹への讃美が重ねられており、春山を美しく愛着ある存在と同列に見なしているのが分かる。

三三三三番は、春山の景観を、「しなひ栄えて」と生氣にあふれた様子に形容し、朝日、夕日、春山、秋山を並べ、美しく素晴らしいものとして讃えている。

青香具山は 日の経の 大き御門に 春山と しみさ
び立てり 畝傍の この瑞山は 日の経の 大き御門
に 瑞山と 山さびいます 耳梨の 青菅山は 背面
の 大き御門に よろしなへ 神さび立てり 名ぐは
しき 吉野の山の 影面の 大き 御門ゆ 雲居にそ
遠くありける
(二・五二)

五二番「青香具山は」においても、青々とした繁つた香具山を、「春山と しみさび立てり」と述べ、最も春山らしく素晴らしい状態として、畝傍山、耳梨山、吉野山と並べて讃美している。

これらのことから考えると、二八番の「春過ぎて… 天の香具山」も、春山の状態を思い起こし、それが過ぎてし

まったことを惜しみながら詠んだのではないかと思われる。

四、新古今の更衣歌としての側面

新古今集一七五番の持統歌を、夏の巻頭歌、更衣歌としての側面から考察する。

春すぎて夏きにけらししろたへの衣ほすてふ天の香具
山 (新古今・夏歌・一七五)

さて、古今集一七五番歌は、夏の部の巻頭に配置されていること、「しろたへの衣ほすてふ」の句で「衣」の語が用いられているということから、一般的に更衣について詠んだ歌と解釈されている。²⁰ 八代集の夏の巻頭歌を見ると、『古今和歌集』を除いて、全て更衣について詠んでおり、更衣が立夏を象徴する行事であることが示されている。夏の巻頭歌であること、「衣」という詞が詠まれていること、という理由から、「更衣」が明確に表されていないにも関わらず、「春すぎて」歌は、更衣の歌として解釈されるようになったのである。以下に八代集の夏の巻頭歌を挙げる。

わが宿の池の藤波さきにけり山郭公いつか来なかむ

(古今・夏歌・一三六)
今日よりは夏の衣に成ぬれど着る人さへは変らざりけり

(後撰・夏・一四七)

鳴く声はまだ聞かねども蟬の羽の薄き衣はたちぞ着てける

(拾遺・夏・七九)

桜色に染めし衣をぬぎかへて山ほと、ぎす今日よりぞ待つ

(後拾遺・夏・一六五)

我のみぞいそぎた、れぬ夏衣ひとへに春をおしむ身なれば

(金葉・夏・九四)

けふよりはたつ夏衣うすくともあつしとのみや思わたらむ

(詞花・夏・五一)

なつごろも花のたもとにぬぎかへて春のかたみもとまらざりけり

(千載・夏歌・一三六)

更衣を詠まない古今集も「藤波さきにけり」と晩春の花を詠むことで惜春を表し、以下の七集は全て、立夏の証である更衣を詠み、春との別れの儀式としてとらえることによって夏を消極的にとらえている。後拾遺集一六五番もホトトギスを詠みながら春の形見である「桜色に染めし衣」によって春への名残惜しさを示している。これらの更衣と惜春が結びつけられる伝統を踏まえると、新古今集の夏の

巻頭歌を、「衣干したり」という更衣によって夏の到来を喜ぶと考えるのは例外的であり、むしろ更衣による惜春を詠んだ歌と捉えるべきであろう。

新古今一七五番歌が、更衣について詠んだとされるのは、「しろたへの衣ほすてふ」という句の中の「衣」という語によるものである。『後撰和歌集』から『千載和歌集』では、「衣ほす」という行動によって更衣を詠んだ歌は見られなかった。そこで、「衣ほす」という事柄が、八代集ではどのような意味で用いられているのか、また夏の結びつきはどの程度のものなのかということが問題となってくる。以下で、「衣」・「袖」を「干す」・「乾かす」ということが詠まれた歌をとりあげて考察する。

ほしがてに濡れぬべき哉唐衣かはく袂の世、になければ
(後撰・恋一・五一九)

惜とて留まる事こそかたからめ我が衣手を干してだに
行け
(拾遺・別・三三九)

神無月よはのしぐれにことよせて片敷く袖をほしぞわ
づらふ
(後拾遺・恋四・八一六)

潮たる、伊勢をの海人の袖だにもほすなるひまはあり
とこそきけ
(千載・恋歌三・八一五)

よしさらば涙に朽ちねから衣ほすも人目を忍ぶかぎり
ぞ
(千載・恋歌三・八一七)

「衣」・「袖」を、「干す」・「乾かす」ということに注目すると、衣や袖が濡れるのは、恋の悩みから流れる涙によるもので、涙が流れ続けるせいで乾くひまもないことを詠むことが主眼となっている。このことから考えると「衣ほす」という行為は、恋の涙は乾くことがない、という事象と結びつくのであって、夏という季節に限定されたり、直接結びついたりするわけではないと言える。「春すぎて」歌が夏歌として印象付けられるのは、「衣ほす」という行為によるのではなく、「春すぎて夏きたるらし」という句によるものなのである。

この他、春歌との対照性についても指摘できる。『新古今和歌集』の春歌に、次のように香具山を詠んだ歌がある。

ほのぼのと春こそ空にきにけらし天の香具山かすみた
なびく
(新古今・春歌・一二)

新古今二番は、春歌の冒頭の歌であり、香具山の霞に注目して春が到来したことを詠んでいる。春歌の初めに霞が

かった香具山をとりあげ、夏の巻頭歌一七五番「春過ぎて」において、再び香具山をとりあげている。これは、春景色と夏景色とを対照させて、季節の推移を効果的に演出するためと考えられる。春歌二番との対照的關係によつて、夏の巻頭歌「春過ぎて」に惜春を明確に述べる詞がなくなつても、春の香具山に思いが寄せられていると指摘できる。

結 び

以上の考察から万葉集一・二八番の主題は、夏の到来を表面で歌いながら、過ぎ去る春の季節を惜しむ気持ちを詠んでいると考えられる。万葉集において春の到来を表す詞が、夏の到来を表す詞よりも豊富であることや、夏には暑さに伴うマイナスのイメージが付与されていることは、夏よりも春に比重が置かれていることを示している。また、多くの夏歌は、ホトトギスの鳴声や卯の花や橘など、夏と結びつく具体的な対象を挙げているが、本歌にはそのように夏を想起させる対象は詠まれていない。さらに、万葉集の時代において、純粹に夏の季節を喜ぶという価値観は見出しがたい。「衣干したり」が更衣という夏の行事であつたとしても、後撰集から詞華集までの夏の巻頭歌を見ると、春服から夏服への更衣が、必ずしも喜ばれているわけでは

ないことがわかる。白妙の衣が実景であれ、見立てであれ、詠歌の態度としては、夏の到来によつて失われてしまつた春を惜しむものである。夏の讃歌という従来の研究は、歌の本質理解において重大な違いがあるのではないだろうか。

注

- (1) 西郷信綱氏『万葉私記（第一部初期万葉）』二三四頁
- (2) 山田孝雄『万葉集講義』一四二頁
- (3) 澤瀉久孝『万葉集注釋 卷第一』二五一頁
- (4) 武田祐吉・土屋文明『万葉集総釈第一』六三頁
- (5) 新井栄蔵氏『万葉集季節観攷——漢語（立春）と和語（ハルタツ）——』《万葉集研究 第5集》一九七六年
- (6) 伊藤博氏『万葉集全注 卷第一』一二〇頁
- (7) 注(6) 伊藤博氏に同じ 一二三頁
- (8) 武田祐吉氏・土屋文明氏『万葉集総釈第一』六三頁
- (9) 窪田空穂『万葉集評釋 第一卷』七六頁
- (10) 戸谷高明氏『万葉景物論』三一頁
- (11) 岩下武彦『持統天皇の香具山の歌』『セミナー万葉の歌人と作品 第一卷』一七〇頁
- (12) 注(2) 山田孝雄氏に同じ 一四四頁
- (13) 注(6) 伊藤博氏に同じ 一二三頁
- (14) 西宮一民氏『歌の表現と理解』（『美夫君志36号』昭和六十年三月）

- (15) 上條彰次氏「百人一首古注一本 持統帝詠「卯花」説の紹介」
『百人一首研究集成』五二二頁
- (16) 注 (15) 上條彰次氏に同じ 五二四頁
- (17) 小林一彦「天の香具山——百人一首古注を窓に持統天皇歌を
読む——」『百人一首研究集成』五五二頁
- (18) 中西進氏「話者としての持統」(『美夫君志26号』昭和五十七
年三月)
- (19) 森斌氏「持統御製歌の考察——卷一・二八番歌について
——」(『広島女学院大学国語国文学史』昭和六十一年十二月)
- (20) 『日本古典文学大系28 新古今和歌集』昭和三十三年
- 『日本古典文学全集26 新古今和歌集』昭和四十九年
- 『新日本古典文学大系11 新古今和歌集』一九九二年
- 『新編日本古典文学全集43 新古今和歌集』一九九五年、